



# 精神分裂病の経過中に出現した強迫現象についての 精神病理学的考察

井上, 靖裕

---

(Degree)

博士 (医学)

(Date of Degree)

1990-11-30

(Date of Publication)

2014-02-13

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲0942

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.11501/3057078>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1000942>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	いの うえ やす ひろ 井 上 靖 裕	（大阪府）
学位の種類	医学博士	
学位記番号	医博い第703号	
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当	
学位授与の日付	平成2年11月30日	
学位論文題目	精神分裂病の経過中に出現した強迫現象についての精神病理学的 考察	

審査委員	主査 教授 中井久夫		
	教授 村上宏	教授 藤田拓男	

## 論文内容の要旨

### 緒言

精神分裂病と強迫現象との関係については、従来より数多くの研究がなされてきた。強迫症状が分裂病の経過に及ぼす影響について、強迫症状が人格崩壊の防波堤となっているという報告や強迫症状を呈する分裂病の予後が良好であるという報告と、その一方で予後が不良であるとの報告とがあり、議論が分かれている。

しかし、従来の研究は強迫症状から分裂病に移行した症例についてであって、慢性分裂病の経過中に強迫症状が出現した例に注目したものは少ない。

本論文においては、分裂病の発病後に強迫症状が出現した症例に注目し、分裂病過程と強迫症状との関係について、予後との連関において考察を試みる。

### 方法

対照となる5症例は、単科精神病院（湊川病院，463床）において昭和57年から平成元年にかけて、著者が診療にかかわり精神病理学的に縦断的な観察を行ってきた患者である。5例とも分裂病が発病した後に強迫症状が発現した症例である（男性1例，女性4例）。

### 結果

5例は、いずれも強迫行為として日常臨床に見られる形式の行為を実行している点で共通性があり、それも、強迫神経症において特に見られやすい具体的形態、たとえばガス栓などのありふれた確認強

迫、相手を巻き込む power operation としての質問強迫などの形態を取っている点で、分裂病者の中で際だって特異な存在として認知される。それは強迫症と分裂症との2つの病的過程の共存あるいは絡み合いについての考察を強いるものである。

まず検討すべき問題は、第1にこれらの患者の病前性格が強迫的であり、分裂病の経過中に強迫症状として析出したのかどうか、第2に強迫神経症の平均発病年齢は分裂病の平均発病年齢よりも早い傾向にあるが、この点についてはどうか、第3に強迫症状は分裂病発病にどれほど遅れてどのような段階で発現したか、第4に強迫症状はどのような状況で発現したか、などである。

#### 1) 病前性格

病前性格については、すべての例で強迫性格を認めなかった。全例に、無口、小心、「心配症」で気分がむらがあり、友人に乏しいという証言があり、分裂気質あるいは分裂気質に近い性格傾向が認められた。

#### 2) 発病年齢と発病状況

Fenton, W.S.と McGlashan, T.H.の報告によれば、強迫症状を有する分裂病のうち、強迫症状が先行する場合は発病年齢が平均16歳、先行しない場合は平均21歳で両者には有意の差があるという。著者の症例においては、32歳に発病した症例を除けば、すべて20歳前後であり、通常の発病年齢の範囲に収まる。

発病の契機は、受験の失敗、失恋、母親との死別、近隣との悶着、大学入学に続く単身生活であった、ごく普通に見られるものであるが、強いていえば、発病の契機が明確で、急性に発病しているものが多いといえることができる。

#### 3) 強迫症状発現年齢と分裂病発病以来の時間

強迫症状発現年齢は21歳から37歳と幅が広く、分裂病発病以来の時間は、1例が3カ月と早い、他は3年から16年と遅かった。また、1例を除いて、すべて再発を経験した後に現われた。

#### 4) 強迫症状の発現状況

強迫症状は、慢性分裂病状態における転回点あるいは変化の大きな時期に出現して、比較的变化の乏しい時期にまで持ち越されていた。

### 考察

精神分裂病においては、しばしば急性陽性症状が消失した直後に、高血圧、消化性潰瘍、微熱、下痢を含む心身症、あるいは吃音、けいれん発作などの好発する時期がある。この時期を中井は「寛解時臨界期」と名付けた。著者の症例において、強迫症状はこの寛解時臨界期に発現する傾向が、3例においてみられた。しかし、強迫症状の発現によって、回復は促進されるわけではなく、むしろ回復過程は長い迂回路に入るようであった。

対人関係論的に見れば、強迫症状の出現によって、患者の対人関係には明確な変化が認められた。著者の症例においては、強迫行為は、確認強迫あるいはその変形である質問強迫（保証強迫）であっ

て、他者を巻き込む形をとっていた。すなわち、治療スタッフに動員をかけ、相手となることを求めた。強迫症状を介して結ばれる周囲との対人関係は、周囲に対して強制的であって、決して放置を許さない強請的なものであった。この点において示される患者の強力性は2面の作用を持つ。すなわち、それは周囲の親愛感を育てるものではないが、しかし、強迫症状によって患者は無視しえない存在となった。強迫観念につきものとされる「無意味だがせざるを得ない」という葛藤は、「無意味である」ことを主張する周囲の人物に対して「せざるを得ない」ことを説得する役に患者が移ることによって、患者の内的葛藤は患者と周囲の人物との間の葛藤に転化した。このようにして獲得した対人関係は、反復・紋切型化、儀式化を免れず、回復過程の停滞の原因ともなった。おそらく、強迫症を併発した精神分裂病の予後についての議論が分れるのは、そのためであろう。重症の巻き込み型の強迫神経症の社会的予後は決して良好とはいえず、多くの分裂病の方がはるかによいのであるから、強迫症状を伴う分裂病の予後が強迫症の重症度および巻き込みの程度いかんによって大きく変動するのは当然であると思われる。

これらの患者においてなぜ強迫症が選ばれたかという問題に答えることは難しい。急性精神病経過後の抑うつ、あるいは消耗（神経衰弱様状態）を始め、ヒステリー性、恐怖症性、心気症性あるいは離人症性症状の出現は決してまれではない。急性分裂病経過後において出現する強迫症状と、分裂病過程との相互作用について考察すると、多くの場合においては、先行する幻覚や妄想の残滓が強迫観念の機能的部分に入り込んでおり、強迫神経症とは異なる独特な病像を示していたが、これらは、結果的には妄想の固定化、体系化を妨げ、主体の能動性の回復に役立ち、人格の解体を妨げていると考えられる。

また、著者の症例では、いずれも何らかの形で、一過性にせよ身体関連の生々しい異常な表象、主にセネストパチーを示した。一般に強迫症者が意識下に腐敗あるいは死体と関連した、血生臭い幻想をもっていることを考えあわせるとき、著者の症例における強迫症状は、身体の崩壊感覚に対する防衛として出現した可能性が考えられる。

## 結語

分裂病発病後に強迫症状が出現した5例について精神病理学的検討を加えた。強迫症状出現の時期は、急性期にはなく、慢性経過中の不安定な時期であった。多数例においては、強迫観念の機能的部分に、幻覚妄想の残滓が入り込んでいた。患者は、強迫行為を介して治療関係者と役割的対人関係を結んだ。強迫症状の出現後、分裂病のはなはだしい再燃はなく、また一般に慢性病像が固定化する傾向にあり、著しい人格の解体は見られなかった。すべての症例において、少なくとも一過性に身体表象の異常が存在した。

## 論文審査の結果の要旨

精神分裂病と強迫症の関連と後者が分裂病の経過に及ぼす影響についてはなお議論が分かれている。ただし、研究の大部分は強迫症が分裂病に先駆する場合についてであり、分裂病経過中の強迫症発症の研究には、理論的にも実際的にも前者に比してはるかに困難性が大きいために非常に少なく、結論も区々である。

本研究は、後者に属する自験例について精神病理学的考察を行いつつ、予後との関係を追跡したものである。その際、まず強迫症概念について理論的検討を行い、Jaspersの古典的強迫概念をSullivanの強迫症の対人関係論の規定、さらには最近の中安信夫の精密な記述的精神病理学によって再検討し、常同性、作為体験などの分裂病症状との境界の厳密な再設定を試みた。

対象とした5症例は、いずれも著者が8年間にわたり追跡した慢性分裂病患者である。その強迫症状は、内的抗争が顕著な典型例から、妄想に基づく疑惑に対して確認強迫を行う症例、精神症状の治癒可能性についての強迫観念にもとづく質問強迫、幻覚によって生じる疑惑を基礎とする確認強迫行為までであるが、いずれも現象形態としては日常の強迫症臨床において遭遇するものであり、なお、すべて、成田の「他者巻き込み型強迫」であった。

病前性格、発病の契機、発病年令には特記すべき特徴はなく、ただ比較的明確な契機を持つ急性発病例であった。重要なのは、すべて再発以後に出現していること、および、大半は急性症状消失直後一過性に種々の身体的動揺を示す、中井のいわゆる回復時臨界期と関連して強迫症状が出現し、また、いずれも生々しく残虐な空想の出現と関連し、おそらくそれに対する防衛として登場していること、さらに、強迫症の出現とともに周囲との対人関係が分裂病型より強迫症型に変化し、確信よりも疑惑を意識の前面に出すことによって妄想的体系化を防げる一方、社会復帰の困難性は増大していることである。強迫症発症が分裂病の予後に与える影響についての学説が分かれるのは、この二面性によるものであろう。

以上、本研究は、分裂病と強迫症状との関係について、その精神病理と予後に対する影響を研究したものであるが、従来ほとんど行われなかった分裂病発病後の強迫症状発現例について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。